

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Gardens at Grasmere : the sympathetic nature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 朗子, Yoshikawa, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/497

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『グラスミアの庭—共感する自然』

吉 川 朗 子

ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) にとっての庭の原風景は、幼少期を過した湖水地方北部コッカマスの邸宅に付随した裏庭、ダーウェント川に面した庭にあるのだろうが¹、その後の少年・青年時代においては、野山を走り回り、湖の美しさに感動し、スノードンやアルプスの崇高な風景に圧倒されるといった具合に、彼は主に「自然の美と脅威によって育てられる (fostered alike by beauty and fear [of Nature])」(*Prelude*, 1805, Bk.1, 306)。しかし背景に退いた感はあるものの、ワーズワスの庭に対する関心は途切れることはない。たとえば、ケンブリッジ在学中の1790年から91年にかけての6週間のクリスマス休暇をワーズワスはドロシーとともにノーフォークのフォーンセットで過ごす²が、ドロシーの手紙によれば、冬のさなかであったにもかかわらず、彼らは毎朝2時間、また午後にもお茶の前にしばしの間庭を散歩したという²。そして庭への関心は、ドロシーとともに過したドーセット西部のレイズダウン・ロッジ、サマセットのオルフォックスデン・ハウス時代にますます強まる。

1 コッカマスにあるワーズワスの生家は現在ナショナル・トラストの管理下にあるが、近年彼らが行った考古学的発掘、地図調査などを含む研究の結果から、この家の裏庭は野菜や果物、ハーブ類を植えたキッチン・ガーデンを中心とするものであったと考えられている。また、18世紀ロンドンに住む中産階級を中心に盛んになっていった小規模なタウン・ガーデンは、やがて郊外の庭、コテージ・ガーデンに影響を与えていったとされる (Longstaffe-Gowan 122-133)。ワーズワスが後にダヴ・コテージ、ライダル・マウントで作ることになるコテージ・ガーデンにも、子供時代過ごしたコッカマスの家の裏庭がヒントを与えていたと考えて、大きな間違いはないだろう。

2 *Letters, Early Years* 46-47.

レイスタウンは人里離れた場所であり食料調達もままならない状況だったため、ワーズワスたちは自活の必要からキッチン・ガーデンを作っていた。ドロシーの手紙には、木を伐ったり根を掘り起こしたりして畑を作ったことが記されている。またウィリアムの手紙からは、彼らがキャベツ、にんじん、カブ、パセリなど色々な野菜を育てていたことが分かる。³

オルフォックスデンの家にも庭があり、果樹園やキッチン・ガーデンもあった。⁴ またドロシーの日記 (*Alfoxden Journal*, 1798) には、彼らがしばしば庭めぐりの散歩に出かけたことが記されている。それは当時はやっていた庭園ツアーの類だったのかもしれないが、ワーズワス兄妹が、庭・庭園にどのような関心を持っていたのかを垣間見せてくれる。次の記述には、人為と自然についてのドロシーの考え (おそらくは兄ウィリアムと共有していると思われる) が記されている。

Walked about the squire's grounds. Quaint waterfalls about, about which Nature was very successfully striving to make beautiful what art had deformed ruins, hermitages, etc. etc. In spite of all these things, the dell romantic and beautiful, though everywhere planted with unnaturalised trees. Happily we cannot shape the huge hills, or carve out the valleys according to our fancy. (15 April 1798, my underlines)

ここには自然対人為という対比があり、自然の力が好意的に語られている。ブラウン (Lancelot Brown, 1716-83) 流の改良、トピアリ (unnaturalised

3 'We plant cabbages; and if retirement, in its full perfection, be as powerful in working transformations as one of Ovid's Gods, you may perhaps suspect that into cabbages we shall be transformed' (*Letters, Early Years* 169); 'I have lately been living upon air and the essence of carrots cabbages turnips and other esculent vegetables, not excluding parsely the produce of my garden' (*Letters, Early Years* 178).

4 *Letters, Early Years* 190.

5 18世紀には多くのカントリー・ハウスで風景庭園が造られたが、これらは比較的自由に見学でき、中産階級以上の人々の間では、カントリー・ハウスめぐり、庭園ツアーが流行した。(cf. 安西 註82; Quest-Riston 145-49) ワーズワスが設計に携わったコロオートの庭にも多くの人が訪れたことが、手紙などから窺われる。

trees) など人工的・不自然な庭作りは批判されている。ここに出てくる ruins, hermitages というのは、ピクチャレスク・ガーデン用にわざわざ作らせたオブジェのことであろう。当時はピクチャレスク・ブームのなか、大庭園の一角に、景観に変化・アクセントをつけるため、わざと朽ちかけたコテージや修道院の廃墟、枯れた倒木、粗末な庵などのオブジェを置くことがあった。そうした人為性にけちをつけつつも、ドロシーは、全体としては美しくロマンチックな光景だとしている。なぜかといえば、自然の力がうまく働いて、人為によって損なわれたものを補っているからだ。ここに見られるような、庭を自然の力と人為との拮抗の場と見る捉え方は、ワーズワスの「廃屋」(‘The Ruined Cottage’, 1797-99) にも通じるものであろう。

「廃屋」には、コテージ・ガーデンが具体的かつ詳細に描かれており、レイスタウン、オルフォックスデン時代に培われた庭に対する美的感受性と庭作りについての実際的な知識とが大いに役立っていると思われる。けれどもこの作品に描かれたのは、作り手を失って庭が次第に荒れていく有様、人為が弱まって庭が自然の力に凌駕されていく有様であった。⁶これは庭作り(cultivation)の詩ではなく、庭の解体(decomposition)、再野生化(re-naturalization)の詩である。この詩においては、自然の忘却の力の前に、人間的な営みの跡はあっさり飲み込まれていく。⁷それに対して、1799年暮れにグラスミアに移住してからのワーズワスが描くコテージ・ガーデンには、自然と人間とが共に庭を作り上げていく様が見られるようになる。とりわけ「廃屋」と好対照を成すのは、最終的に同じ作品(*The Excursion*, 1814)に収められることになった「グラスミアの我が家」(‘Home at Grasmere’, 1800)に挿入される母親(妻)を亡くした家族の庭の話である。前者におい

6 二人の手紙からも窺えるように(*Letters, Early Years* 154, 162)、ドーセットで彼らが見たコテージには、貧困ゆえに荒れ果て、みすばらしいものも多くあった。しかし、ワーズワスが「廃屋」で描くマーガレットの庭は、もともとは手入れの行き届いたものであり、これが荒れていく様については、人為と自然の力との拮抗関係の変化という観点から描かれている。

7 「廃屋」における人間と自然の関係については、'外大論叢'前号(第59巻6号)所収の拙論「マーガレットの庭 自然と人間の関係をめぐる詩人の考察」で詳述した。なお当論考は前号の論考と補充しあう。

ては人為と自然の力とが拮抗する場であった庭が、後者では自然の力と人間の想像力とが協調、共存する場となっている。自然は人間に無関心な他者ではなく、人間の感情に寄り添うものとして描かれている。こうした庭の描かれ方に見られる自然観の変化には、やはり、ダヴ・コテージにおいて実際に庭作りをはじめたことが大きく関わっているだろう。

上述のように、ワーズワスが庭を作るのはこれが全くの初めてというわけはなかった。けれども、レイスダウン・ロッジにしてもオルフォックスデン・ハウスにしても、庭はもともと屋敷に備わっていたものであって、彼らが自分たちで一から作ったわけではない。そしてまた、「庭を作ること」の持つ意味合いが、これら二つとダヴ・コテージの場合とでは大きく異なっていた。ダヴ・コテージにおける庭作りがワーズワス兄妹にとってどのような意味を持つのか、そしてその庭作りの体験がワーズワスの自然観にどのような変化をもたらししていくのかを、考察していきたい。

*

1799年12月20日、ワーズワスは妹ドロシーとともに、終の棲家を作るべく、湖水地方中部グラスミアの谷へやってくる。そのときの様子は「グラスミアの我が家」に詳しく記されている。村はずれのダブ・コテージにやってきた二人は、カーテン作り、部屋の壁塗り、ドアの修理など家の中を居心地よく整えることに忙しく時を過ごす。それとともに彼らの関心があったのは庭作りであった。ダブ・コテージに到着して4日後のコウルリッジ宛の手紙の中で、ワーズワスは、家に付属した庭、果樹園が特にドロシーのお気に入りであることに言及している。

D is much pleased with the house and *appurtenances* the orchard especially; in imagination she has already built a seat with a summer shed on the highest platform in this our little domestic slip of mountain. The spot commands a view over the roof of

our house, of the lake, the church, helm cragg, and two thirds of the vale. We mean also to enclose the two or three yards of ground between us and the road, this for the sake of a few flowers, and because it will make it more our own. Besides, am I fanciful when I would extend the obligation of gratitude to insensate things? May not a man have a salutary pleasure in doing something gratuitously for the sake of his house, as for an individual to which he owes so much. (*Letters, Early Years* 274-75, my underlines)

ここには、家を家らしくするものが庭であるという考えが窺える。冬のさなかであるから実際の土いじりは開始していないが、二人の兄妹は、夢見る冬の庭師たちよろしく、眺望を楽しめるといふ斜面ならではの地形の特徴を利用したコテージ・ガーデン作りをもくろんでいる。興味深いのは、庭を囲い込むことが家をより自分たちのものという感じにしてくれると言っている点である。もちろん、家の前の土地を道路から仕切るために囲い込むことは、土地の所有を明確にしようとする営みではあるのだろうが、そのあとに、家のために何かしてあげたいという思いを表明している点から考えると、庭を囲い込むことで、家と自分たちとの親密な空間を築きたいという思いがあるようだ。家の裏手は山の斜面に囲まれており、すでに‘domestic’な感じを作り出してくれている。街道に面した部分を囲い込むことで sense of home をより確かなものにしようとしたのだろう。ワーズワスにとって庭は家の延長である。庭を作ることは家を作ること、家庭を作ることである。⁸ 幼くして

8 もともとバブであったダヴ・コテージは、街道からすぐ建物に入れるように作られていた。こうした「公共」のために作られた建物を「私的な」空間、家庭らしい空間にするためには、家の前の土地を少し囲い込んで庭を作るという作業は有効だっただろう。イギリス風景庭園ブームの立役者ブラウンの後継者を自認するレプトン (Humphry Repton, 1752-1818) は、庭というのは庭園 (park) と違って、何よりもまず「私有化 (appropriation)」の感覚、これぞ我が家という感覚を与えるものでなければならぬと主張している。18世紀には一方では風景庭園ブームがあって、庭の囲いを見かけ上外して「開かれた庭」というイリュージョンを作り出す動きがあったが、他方では中産階級を中心にタウン・ガーデン、ついでコテージ・ガーデンなど囲われた小さな庭への関心が高まってくる (Crowford 3-36; Longstaffe-Gowan 122-133)。そこでは地所は特権的地位の象徴 (a sign of privilege) というよりも家庭の象徴 (a sign

両親を亡くし、兄弟別れ別れに暮らしてきたワーズワス兄妹にとって、グラスミアのダブ・コテージは、コッカマスの生家を離れて以来初めて作る家であった。そして庭作りはその大事な要素であった。

*

ドロシーの『グラスミア日記』(*Grasmere Journal*, 1800-1802)を読むと、二人の庭がどんなふうになられていたのかがよく分かる。地形を生かしてテラスを作り歩き回ることが出来るようにしたり、シダやコケなど冬に緑がきれいな植物や早春や晩秋に楽しめる花を中心に植え付けを行ったり、豆類や果樹、ベリー類など食用にもなり花も楽しめるものを積極的に取り込むなど⁹、この庭作りの実践は、ワーズワスの後の庭園論、景観論、コルオトンでのウィンター・ガーデンのプラン作りに確かな論拠を与えていくことになる¹⁰。コテージ・ガーデン史の資料として読んでも興味深い。まずはこの『グラスミア日記』を検討しつつ、庭を作るということがワーズワス兄妹にとってどういう意味を持ったのか考えてみたい。

1800年5月14日、ワーズワスは弟ジョンとともに、ヨークシャーヘメアリ・ハッチンソンに会いに出かける。グラスミアへ来て半年の間兄と一緒に家と庭を整えてきたダブ・コテージで初めて一人になったドロシーは、胸がいっぱいになる。ひとしきり泣いて長い散歩を行った後、彼女は兄の帰宅まで、留守の間日記を書こうと決心する。

I resolved to write a journal of the time till W. and J. return, and I set about keeping my resolve, because I will not quarrel

of home) となる、と Crowford は述べている (Crowford 24)。ワーズワスのダブ・コテージの庭もこの新しい美学に沿っていると言うことも出来るだろう。

9 ダブ・コテージの庭は、下層階級の人々が生活の糧を得るために作った実用の庭と、ピクチャレスクの文脈のなかで登場した審美的な庭とがあわさった新しいタイプのコテージ・ガーデンであった。(Scott-James 46-47)

10 コルオトンでのウィンター・ガーデン作りとワーズワスの景観論については、拙論 “The Garden as a Home: Wordsworth’s Winter Garden at Coleorton” で詳述した。

with myself, and because I shall give Wm. pleasure by it when he comes home again. (14 May 1800)

兄ウィリアムが帰ってきたときに喜んでもらえるよう日記をつける、とあるが、ドロシーが兄を喜ばせるために行ったのは日記をつけることだけではなかった。留守番中の約3週間、彼女の日記には庭仕事の記述が多い。ほとんど毎日のように、植え付け、水遣り、草抜き、植物採集など庭仕事をしている。豆、にんじん、たまねぎなどの野菜を植えたり、イボタノキなどで生垣を作ったり、苔を集めてきてグランドカバーにしたり、近所の人から分けてもらったり山や湖畔から採取してきた植物を植えたり、といった庭仕事に取り組む様子を、ドロシーは逐一日記に記している。日記をつけることが兄のいない淋しさを紛らわすことであったのと同じく、庭仕事に励むこともまた同じ役割を果たしている。兄を喜ばすとは、すなわち庭ができていく様子を報告すること、そして出来上がった庭を見せることでもあるのだ。6月7日の夜更けに帰宅した兄ウィリアムと明け方まで語り合ったあと、早朝の庭をドロシーは誇らしげに兄に見せている。

After our first joy was over, we got some tea. We did not go to bed till 4 o'clock in the morning, so he had an opportunity of seeing our improvements. The birds were singing, and all looked fresh, though not gay. (7 June 1800)

「廃屋」のマーガレットが、最初のうち庭仕事をしながら夫の帰りを待とうとしたように、ドロシーも兄の帰りを待ちながらせせと庭仕事に励む。マーガレットの物語の場合、庭は結局彼女を慰めることにはならなかったが、現実においては、庭仕事は確かにドロシーを慰めた。(このことは、おそらく「グラスミアの我が家」でワーズワスが描いたコテージ・ガーデンの役割と関わってくるのだろうが、それについては後述する。)

さて、ワーズワスが帰宅して二日後の6月9日には、二人は早速庭仕事

兄は桜の木の剪定、妹はサヤインゲンの種まきと草取り を再開している。

In the morning W. cut down the winter cherry tree. I sowed French beans and weeded. A coronetted Landau went by, when we were sitting upon the sodded wall. The ladies (evidently Tourists) turned an eye of interest upon our little garden and cottage. (9 June 1800, my underlines)

この項で興味深いのは、庭仕事をする横を馬車で通りかかった旅行者が、彼らのコテージと庭とを興味深げに見ているという記述である。¹¹ オルフォック スデン時代に散歩の道すがらコテージや庭を見て回ることが日課だったワーズワスとドロシーだが、ここでは立場が逆になっており、馬車に乗って走りすぎる旅行者と芝土を敷いた塀に腰を降ろす自分たちが対比されている。別段感情はこめられてはいないが、‘(evidently Tourist)’ という括弧書きでのつけ足しには、旅行者と住人を区別する意識が垣間見られる。また ‘our little cottage and garden’ という箇所には、庭の鑑賞者と作り手とを区別する意識。ここは自分たちが耕し、種をまき、育てた庭なのだという自負心が覗いているように思われる。こうした思い入れは、ドロシーが親友のジェイン・マーシャルに宛てて書いた1800年9月10日付の手紙にも表れている。

We have... a small orchard and a smaller *garden* which as it is the work of our own hands we regard with pride and partiality. This garden we enclosed from the road and pulled down a fence

11 上述のように大庭園(パーク)を見て回るツアーというのは、18世紀を通してさかんに行われていたが、パークの外に作られたモデル・ヴィレッジから始まって、コテージ・ガーデンもまた次第にカントリー・ツアーの目的の一部になっていく。(Scott-James 22-23; Darley 33, 49-50)。(ただしこれが盛んになるのはもう少しあとの時代、雑誌などでコテージ・ガーデンが盛んに紹介され、鉄道などの交通機関が飛躍的に発達した19世紀後半になってからである。)たとえば、「ランゴレーンの貴婦人」(Ladies of Llangollen)として知られる、もともと貴族だった二人の女性が北ウェールズのランゴレーンに作ったコテージ・ガーデンには、1780年代後半ごろより、多くの旅行者が訪れるようになる (Scott-James 30-31)。ワーズワスも1824年ロバート・ジョーンズに案内されて北ウェールズを旅行した際、妻メアリとともにこのコテージ・ガーデンを訪れている。ドロシーの日記に描かれる旅行者の姿もまた、そうしたコテージ・ガーデン・ツアーの一端を示すのかもしれない。

which formerly divided it from the orchard. The orchard is very small, but then it is a delightful one from its retirement, and the excessive beauty of the prospect from it. Our cottage is quite large enough for us though very small, and we have made it neat and comfortable within doors and it looks very nice on the outside, for though the roses and honeysuckles which we have planted against it are only of this year's growth yet it is covered all over with green leaves and scarlet flowers, for we have trained scarlet beans upon threads, which are not only exceedingly beautiful, but very useful, as their produce is immense.

(*Letters, Early Years* 295, my underlines)

ここには、自分たちがはじめて作った家に対するドロシーの自負心が表れている。とりわけ自分たちの手で愛情をこめて作り上げた庭に対する思いは強い。‘small’ という形容詞が何度も繰り返されているが、それは、囲われた小さなスペースであるが故の居心地のよさ、親密な空間を持つ appropriation の感覚を表現しているだろう。花や緑でコテージの外壁を美しく飾るという行為にも家に対する愛情が感じられるが、ここで興味深いのは、コテージの壁を這わせるのにバラやスイカズラだけでなく、豆の花も使っている点である。豆はその赤い花が美しいだけでなく、実が大事な食料源となる。家を飾るといった観賞用としてだけでなく、そこに住む家族の胃袋を満たすという実用としての役割も持つ。こうした美と用の庭、心と身体を喜ばす庭というのは、「グラスミアの我が家」においてワーズワスが描いた庭のあり方にも通じる。

*

「グラスミアの我が家」の最初の草稿(MS.B)は、彼らが湖水地方に移住して間もなく、1800年に作られた。ここではグラスミアの谷自体が山々に囲われたひとつの庭のような世界 囲われた土地 (enclosure) として描かれる。ここに暮らす住人たちは、ステイツマン 先祖伝来の畑を耕し、山を歩

き、羊を飼い、自給自足の暮らしを営む独立自営農民として描かれており、Ann Scott-James のいう Cottager の階級に含まれると思われる¹²。そして、後に *The Excursion* に組み込まれることになるエピソードに描かれた、母親を亡くした少女たちの庭は、実用的な庭であるばかりでなく、美的センスを発揮して作られたものになっており、ダブ・コテージの庭と並んで、19世紀を通して次第に美的要素が強くなっていくコテージ・ガーデンの初期の例とすることができる¹⁴。

さて、妻に先立たれ、幼い娘たち6人とともに後に遺された男の話という
と悲しい話が想像されるが、彼らの家を訪れればそう不幸な話でもないことが分かるだろう、と語り手は物語を始める。そして「奪った方 (= 神) は、見掛けの半分も奪っていなかったことが分かるだろう。あるいは、われわれの祈りに応えるどころか、我々の祈りをはるかに超えて、希望が水をやらなかった土地に恵みを生み出す土壌をお与えになったのだ」(548-52)と述べ、遺された家族が悲しみから立ち直り、再生していくことを、庭の比喻で語っている。「廃屋」ではマーガレットは悲しみのあまり庭仕事をできなくなり、庭と共に朽ちていった。あるいは、庭が野生化して繁茂するのと反比例するかのようになり、衰弱し、死んでいった。それに対しこのエピソードにおいては、庭仕事が悲しみを癒すことに役立っている。庭は、母親がいなくなって侘しいものになりかねない家 / 家族を明るく照らすのだ。

彼らのコテージは、この地方の他の家々と同じく土地の石でできており、「まるで岩から自然と生えてきたかのような」(555-56)と描写される。これは周囲の風景と調和した家を好むワーズワスの考え方に沿っており、後に『湖水案内』(*Guide to the Lakes*, 1810-1835) に組み込まれる住居論に発

12 Scott-James はいわゆる「コテージ・ガーデン」(実用だけでなく観賞用という目的も持った庭)の起源は、ある程度自活する力、生活を楽しむゆりのあった小屋住みの独立自営農民、職人などが作った庭であったらうとしている (Scott-James 9-10)。

13 MS.B, 533-606. 以後 'Home at Grasmere' からの引用は MS.B による。

14 18世紀末ごろより、紳士階級のなかで、経済的事情や審美的価値観などからコテージに暮らす者が出てくると、コテージ・ガーデンは次第に美的に洗練されていったが、19世紀になると、その傾向はさらに強まる (Scott-James 10)。

展することになるが¹⁵、ワーズワスはこの家が単に自然の風景に溶け込んでい
るだけではないことに注目する。この地域で産出される暗青色の石でできた
家は、ややもすれば暗い沈鬱な雰囲気を作りかねないが、この家は他の家と
違ってそうした暗い雰囲気を軽減されていると言う。

..... but nearer view
Will show it not so grave in outward mien
And soberly arrayed as for the most
Are these rude mountain-dwellings Nature's care,
Mere friendless Nature's but a studious
Of many fancies and of many hands,
A play thing and a pride; for such the air
And aspect which the little Spot maintains
In spite of lonely Winter's nakedness. (556-64)

一般には山に住む貧しい人々の家は粗末で地味であるが、この家は、単に孤
独な自然の世話を受けるだけでなく、想像力と少女たちの熱心な仕事のおか
げで、冬枯れのわびしい風景の中でも晴れやかだったとされている。'lonely
Winter's nakedness' とは、妻であり母である女性を亡くした家／家族の心
象風景でもあるだろう。愛する人に先立たれた家族にとって、庭作りはひと
つの慰め、心の支えであったことが分かる。

They have their jasmine resting on the Porch,
Their rose-trees, strong in health, that will be soon
Roof-high; and here and there the garden wall
Is topped with single stones, a showy file
Curious for shape or hue some round, like Balls,
Worn smooth and round by fretting of the Brook

15 Cf. 'The dwelling-houses, and contiguous outhouses, are, in many instances, of the colour of the native rock, out of which they have been built;... these humble dwellings remind the contemplative spectator of a production of Nature, and may (using a strong expression) rather be said to have grown than to have been erected; to have risen, by an instinct of their own, out of the native rock' (*Guide to the Lakes* 70)

From which they have been gathered, others bright
And sparry, the rough scatterings of the Hills.
These ornaments the Cottage chiefly owes
To one, a hardy Girl, who mounts the rocks; (565-74)

ジャズミンが戸口の周りを飾り、バラが壁を伝って屋根近くまで伸びているという描写は、典型的なコテージ・ガーデンの様子を伝えている。また、グースベリーやハーブを植えるなどキッチン・ガーデンの要素も持つ。マーガレットの庭あるいはダブ・コテージの庭と同じく、美と用両方を兼ね備えた庭であったことが分かる。鳥の巣のおもちゃ(A mimic Bird's-nest)を置いたり、堀にきれいな石を集めてきて並べて飾ったり、など人工的な要素もあるが、トピアリなどを批判するワーズワスも、これを否定的には見ていない。石は近くの川や山から拾ってきたものであるし、またこれを集めてきた元気な少女の人柄を伝えるものであるからだろう。この少女は、まるで少年のように野山を歩き、息子のように父親の仕事を助ける、とある。この少女だけでなく、6人の娘たちはみな互いに助け合い、母親がやっていた仕事を分担して行い、母親の一番の役割 家を家庭らしくするという仕事 を見事にこなしている。

Mild Man! He is not gay, but they are gay,
And the whole House is filled with gaiety. (605-606)

母親の死によって壊れたかもしれない家族/家を守ったのが庭作りの仕事であったと言えるだろう。庭が守られることで、家も家族も守られる。庭は家族を繋ぐ絆としての役割を果たしている。

男やもめと幼い子供たちの物語を記したとき、ワーズワスは自分の子供時代を思い出していただろうか。コッカマスのワーズワス家では、母親を亡くしたとたんどロシーは親戚に預けられ、上の二人(リチャードとウィリアム)は寄宿学校へ入れられて、幼い弟二人だけが家に残るという具合に、家族は

ばらばらになってしまった。その6年後に父親が亡くなると、家までも失い、ワーズワス家の子供たちは家族離散の憂き目にあう。コッカマスにも庭はあった。でも残念ながらそれは家／家族を守るものとしては機能しなかった。家も庭も幸せな家庭生活も、現実においてはあまりにもあっさり壊れてしまった。そんなふうにはかなく過ぎ去った幸せな子供時代を懐かしく思い出している作品に、「蝶に寄せて」(‘To a Butterfly’), 「雀の巣」(‘A Sparrow’s Nest’) という詩がある。これらとともに、ダヴ・コテージの庭を通してコッカマスの庭で過した子供時代を想うという設定になっている。

「蝶に寄せて」では、ダヴ・コテージの庭で見かけた蝶に、お前は私の幼少期を思い出させるからしばらくここに留まってほしい、と呼びかける。そして子供のころコッカマスの家の裏庭で妹と二人で蝶を追いかけたこと、妹の蝶に対する態度がいかに繊細であったかを思い出す。

Stay near me do not take thy flight!
A little longer stay in sight!
Much converse do I find in Thee,
Historian of my Infancy!
Float near me; do not yet depart!
Dead times revive in thee:
Thou bring’st, gay Creature as thou art!
A solemn image to my heart,
My Father’s Family! (‘To a Butterfly’, 1-9)

また「雀の巣」では、ダヴ・コテージの庭に雀の巣を見つけたことをきっかけに、やはり子供のころ妹と二人庭の生垣に雀の巣を、そしてそこに美しい青い卵を見つけた時の喜びを懐かしく思い起こす。

Look, five blue eggs are gleaming there!
Few visions have I seen more fair,
Nor many prospects of delight

More pleasing than that simple sight!
I stared, seeming to espy
The home and shelter'd bed,
The Sparrow's dwelling, which, hard by
My Father's House, in wet or dry,
My Sister Emmeline and I
Together visited. ('The Sparrow's Nest', 1-10)

裏庭の生垣に守られるようにして作られていた雀の巣に収まる5つの青い卵も(5という数字がワーズワスの兄弟の数と一致しているのは偶然だろうか)、ひらひらとすぐに飛んでいってしまう繊細な蝶も、子供時代の幸福な家庭生活の壊れやすさ、はかなさを暗示しているだろう。蝶と卵は、それらを傷つけないようにと震えながら近づくドロシーの存在によって余計にそのもろさが強調されている。これらの詩は、幸せな子供時代を過ごした庭、あまりに早く奪われてしまった幸福な家庭生活に対するエレジーであるとも言える。そしてダヴ・コテージの庭は、失われた子供時代の楽園、家庭を再創造しようとする試みだったと言えるだろう。

*

さて、ワーズワスがドロシーと二人で2年間かけて再創造してきた家庭の象徴としての庭 ダヴ・コテージの庭は、1802年新しい家族を迎えることになる。この年の夏、アミアンの和約によって渡仏が可能になったため、ワーズワスは過去の恋愛の清算をすべくフランス北部のカレーへ出かけることにする。そして、帰国後はその足でヨークシャーのギャロウ・ヒルへ赴き、幼馴染のメアリ・ハッチンソンと結婚式を挙げ、彼女をグラスミアへ連れて帰る計画を立てる。そのためにドロシーとともに3ヶ月ほど家を留守にすることになったワーズワスが、家と庭にしばしの別れを告げるという設定で書いたのが「いとまごい」('A Farewell')という作品である。夏の間3ヶ月も留

守にしたならば、庭は、マーガレットの庭ほどではないにしても、かなり荒れ放題になるはずである。けれども詩人は、「天の穏やかな世話 (heaven's peaceful care)」 雨と陽光とに庭を任せると言う。もちろんこれは詩的許容 (poetic license) による誇張 (虚構) であろうが、どうしてそのような考え方が生まれたのだろうか。

Farewell, thou little Nook of mountain ground,
Thou rocky corner in the lowest stair
Of Fairfield's mighty Temple that doth bound
One side of our whole vale with grandeur rare,
Sweet Garden-orchard! of all spots that are
The loveliest surely man hath ever found,
Farewell! we leave thee to heaven's peaceful care,
Thee and the Cottage which thou dost surround.

(‘A Farewell’, 1-8)

ここに描かれているように、ダブ・コテージの庭は、フェアフィールド山系に連なる岩山の懷に抱かれる形の地所となっており、初めから囲われた場所、庭にふさわしい場所であった。(上掲のワーズワスからコウルリッジにあてた手紙では ‘our little domestic slip of mountain’ と描写されていた。) 山々に囲われたグラスミアをひとつの庭とみなすならば、ダブ・コテージの庭は、グラスミア・ガーデンの中のひとつのコンパートメントということになる。庭はワーズワスたちが来る前からすでにそこにあったとも言える。グラスミアの谷が山々に守られ、その地に根を下ろした植物たちが雨と太陽とに育まれるように、ダブ・コテージの庭もまた、天が世話してくれるのである。

この庭で人間の行う作業と言え、時折山や湖の岸辺からとってきた草花を移植してやることだけである。

Dear Spot! Whom we have watch'd with tender heed,
Bringing thee chosen plants and blossoms blown
Among the distant mountains, flower and weed
Which thou hast taken to thee as thy own,
Making all kindness register'd and known;
Thou for our sakes, though Nature's Child indeed,
Fair in thyself and beautiful alone,
Hast taken gifts which thou dost little need; (33-40)

庭はもともと自然のまま美しく飾りなど必要ないのだが、人間が与えた贈り物（移植した植物）を、人間のために親切にも受け入れ、わが子のようにかわいがってくれた、とある。ここには、庭作りにおいて主導権を持つのは自然であり、人間はその助手に過ぎないという考えが表れている。そしてまた、自然は人間の願いを聞き入れる優しい母親のような存在として描かれている。「廃屋」においては人間と自然の力のせめぎあいの場所であった庭が、ここでは、自然と人間とが互いに協力し寄り添いあう場所になっている。

ダブ・コテージの庭がグラスミア・ガーデンという大きな庭の一部であると考えれば、山や湖の岸辺からとってきた草花をダブ・コテージの庭に移植するということは、植物の配置をほんの少し変えることに過ぎない。ワーズワスは、自分の庭を囲い込んでいたが、外なる庭と内なる庭は地続きであるということ意識していた。彼らの庭の草花は、ほとんどが湖水地方に自生するものであった。したがって、彼らは時折庭の植物を外に移すことも行っていたが、それが生態系を破壊することにはならなかったのである。ラウドン (John Claudis Loudon, 1783-1843) らガーデネスク派が庭の芸術性を強調し、庭が自然界とは別の自立性を確保できるよう積極的に外来種を取り入れたのに対し、ワーズワスは在来種で庭を作ることをよしとした。後に『湖水案内』を書く際には、外来種を植えることにもある程度理解を示しているが、その場合も外来種は家のすぐそばのみにとどめ、少しずつ在来種を混ぜていき、庭の中と外の植生が自然に溶け合うようにすることを勧め

ている。¹⁶

自分たちが持ち込んだ植物を家族のように受け入れてくれた庭に対し、ワーズワスは、今度は新しい家族を受け入れてくれるように頼む。これはもちろん彼の妻となる女性、メアリ・ハッチンソンのことであるが、彼女についてワーズワスは、自分の妻になるというよりは、庭と結ばれることになる、というような言い方をする。

We go for one to whom ye will be dear;
And she will love this Bower, this Indian shed,
Our own contrivance, building without peer:

.....

She'll come to you; to you herself will wed;
And love the blessed life which lead here. (25-32, my underline)

メアリは庭も含めた家族の新しい一員として迎え入れられるのだ。そして庭はこの新しい家族に、過ぎ去った日々('tales of years gone by')を語る手助けをする。庭は現在と過去とを繋ぐもの、あるいは現在と過去の連続性を保証するものとして期待されるのだ。その物語のなかには、庭に作られた雀の巣についての話も含まれる。

And in this bush our sparrow built its nest,
Of which I sung one song that will not die. (55-56)

上述のように、雀の巣は子供のころの幸せな家庭を表している。現実にはあっけなく失われてしまったが、それは一方では詩の中に永遠化され、他方ではダヴ・コテージの庭の中に再現されている。そしてそれは、メアリという新しい家族を迎えて作っていくこれからの家庭の姿を予感させるものであっただろう。庭を通して過去、現在、未来は繋がっていく。

16 *Guide to the Lakes* 87

以上見てきたように、ダヴ・コテージにおける庭作りはワーズワスにとって家族・家庭を再生する試みと重なっていた。家族が増えてダブ・コテージを手放さなければならなくなったときも、愛するわが子を相次いで二人失って家族が危機的状況を迎えたときも、庭作りはワーズワスにとって大きな慰めとなり、支えとなった。庭作りを通してワーズワスは、自然を人間の営みとは無関係に存在する他者としてではなく、人間の感情に寄り添う存在として眺めるようになっていく。こうした見方はセンチメンタルにも見えるが、後にワーズワスが『湖水案内』で展開するような、人間と自然とが互いに影響を与えながら住環境を作っていくという里山の自然観につながっていくものと思われる。そして人と自然、家族同士、過去と現在を繋ぐダヴ・コテージの庭は、ライダル・マウントへ移ると、人々の集まる庭、社交の庭へと変わっていく。

Works Cited:

- Crowford, Rachel. *Poetry, Enclosure, and the Vernacular Landscape 1700-1830*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Darley, Gillian. *Villages of Vision*. London: Architectural Press, 1975.
- Longstaffe-Gowan, Todd. 'Gardening and the Middle Classes 1700-1830'. *London's Pride: the Glorious History of the Capital's Gardens*. Ed. Mireille Galinou. London: Anaya Publishers Ltd., 1990, 122-33.
- Quest-Ritson, Charles. *The English Garden: A Social History*. London: Penguin, 2001.
- Scott-James, Anne. *The Cottage Garden*. London: Penguin, 1982.
- Wordsworth, Dorothy. *Journals of Dorothy Wordsworth*. 2 vols. Ed. Earnest De Selincourt. London: Macmillan, 1952.
- Wordsworth, William. *The Guide to the Lakes*. Ed. Ernest de Selincourt. 1906. With a new preface by Stephen Gill. London: Frances Lincoln, 2004.
- *The Poems of William Wordsworth. Collected Reading Texts from the Cornell Wordsworth*. Ed. Jared Curtis. 3 Vols. Penrith, Cumbria : Humaities-EBooks, 2009.
- Wordsworth, William and Dorothy. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth. I. The Early Years, 1787-1805*. Ed. Ernest de Selincourt,

rev. Chester L. Shaver. Oxford: Clarendon Press, 1967.

Yoshikawa, Saeko. 'The Garden as a Home: Wordsworth's Winter Garden at Coleorton'. 『関西英文学研究』 第3号 2009年, 35-54.

安西 信一 『イギリス風景庭園の美学：＜開かれた庭＞のパラドックス』 東京大学出版会 2000年

吉川 朗子 「マーガレットの庭 自然と人間の関係をめぐる詩人の考察」 『外大論叢』 第59巻第6号, 2008年, 87-107.